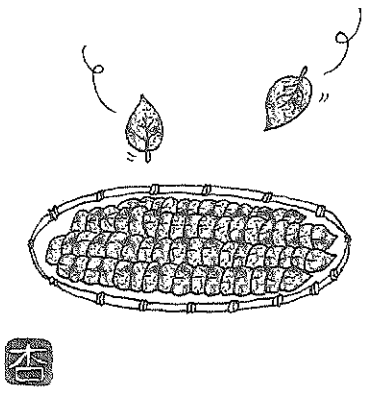
毎日が、散歩の途中 25

紅葉の柿の葉寿司



文と絵　岡本 杏子

木の葉が色づいてくると恋しく思うものがある。まだ実家にいた頃、母がよく作ってくれた紅葉の柿の葉寿司だ。

柿の葉寿司といえば若葉でくるんだものが一般的だけれど、我が家では秋だけのお楽しみとして、錦に色づいた柿の葉でメ鯖のお寿司をくるみ、ひと抱えもある大きな竹ざるにいっぱいに並べて、祖父や祖母も呼んでみんなでにぎやかに食べた。

宴会の支度は家族総出で朝から大騒ぎ。母はネタにするメ鯖を仕込み、しめじと菊の和え物や里芋の煮物などをせっせと作る。父は物置の奥から竹ざるを出したり、酒の器を選んだりの雑用全般。

庭の落ち葉の中から、虫食いがなくてきれいな錦色の柿の葉だけを拾って、庭の流し台で一枚一枚ていねいに洗い、拭いておくのは兄と私の仕事。

「ついでに庭も掃いといて」と、くく、器用な母と兄がお寿司を握る役、ぶきっちょな父と下っ端の私が葉でくるむ役をやったのだろう。でも、4人で飯台を囲んでいたことは酢飯の甘酸っぱい匂いとともに思い出す懐かしい記憶だ。

私も兄もとうの昔に家を出て、両親は二人で暮らしている。たびたび里帰りしているのだけれど、そういえばこの十年来、柿の葉寿司を食べた記憶がない。葉が錦に色づくのは秋の中でもほんの短い間だけだから、つい時期を逸してしまうのだ。

年々丸くなっていく両親の背中を思うと、「そのうちまた」と呑気にしてはいられない。誘えばうちの娘や甥っ子も喜んで手伝うに違いない。今年の実家の秋はにぎやかになりそうだ。

母からの指令が飛んですぐに掘る役、ぶきっちょな父と下

仕事は増える。

お昼をはさんでいったん解放されるのだが、夕方、「お米が炊けたよー」の母の一声で、またバタバタと家族が飯台のまわりに集まって、お寿司づくりが始まる。

酢飯をかき混ぜる母、団扇であおぐ父、なんだかお祭りみたいになる。太陽の光が部屋のずっと奥の方まで差し込んで、まだ部屋の灯りはともさなくてもいい。

酢飯が冷めたら一口サイズに握ってメ鯖をのせ、葉でくるむ。秋の柿の葉は厚みがあって硬いから、若葉のように四角くぴったりとはくるめない。だから柏餅風に、はさむような格好になる。色を楽しみたいから、つるつるした葉の表が外側に見えるようにくるむのも春とは違う。

誰がどの役をやったかは忘れてしまったけれど、おそらく

岡本 杏子（おかもと きょうこ）
神奈川県生まれ。世田谷区在住のライター。店舗・住宅・人物の取材執筆を得意とする。今までに経験した職は巫女さんや写真家秘書などアルバイトと正社員を含めて20を超えるが、ランタン一筋に落ち着き、はや15年。散歩と鵜飼と猫をこよなく愛する、一女の母。

特別寄稿

韓国の停電

朝日新聞社　牧野 愛博

9月15日、厳しい残暑の日。私は仁川市の仁荷大学にお邪魔していた。知り合いの大学教授から、日本語を勉強している学生たちに、特派員生活の体験談を話して欲しいと頼まれたからだ。学生の皆さんは、みんな日本語が堪能。「ほとんど日本語で話して頂いて結構です」というので、気楽に引き受けた。

約束していた午後4時ごろ、教室に行ってみると、何だか薄暗い。どうしたんだろうと思ったら、学生の一人が「停電しているんです」と言う。ソウルに赴任して4年半余りになるが、停電なんて初めての経験だ。マイクも使えないから、大声で約2時間、集まって頂いた約80人の学生の皆さんと対話をした。

友人の教授氏は「我が国はこんなに発展したのに、停電なんてなんたることか」と憤っている。別の教授氏は「北韓（北朝鮮）のテロかもしれない」と物騒な事を言う。確かに、仁川市は北朝鮮に隣接しているから、過去にもGPSが混乱するなど、サイバーテロの被害を受けたことがある。

そのまま午後6時過ぎ、近くのスンデ（豚の腸詰め）専門店に出かけた。学生の代表5人と教授2人、私の計8人。まだ停電が続いているから店は薄暗い。薄暗いのは我慢できるが、なんとも蒸し暑い。最初にスンデを食べているうちは何とか我慢できたが、そのうちスンデクッパプ（スンデ汁）が出てくると、もう滝のように汗が流れ出した。

学生が気の毒がって、小さな団扇を貸してくれたのだが、ほとんど役に立たない。タオル地のハンカチは汗を吸ってたちまち重くなった。汗を抑えようと、なるべくスープは飲まないようにしていると、みんなが「スンデはお嫌いですか」と聞いてくる。もうヤケになってガツガツ食べた。

店の人も自分の店にあるモーターを使って最低限の電力は確保しているのだが、クーラーまでは手が回らない。

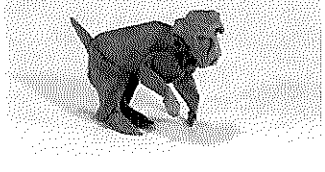
汗まみれで食事を終えるころ、ようやく電気がついた。後で聞いてみたら、韓国電力が電力の需要予想を間違えて、一部の発電所で点検作業を始めてしまったため、残暑で爆発的に伸びた電気の需要に追いつかなかったことが原因だったそうだ。

政府は非常に恐縮し、担当閣僚は辞めるわ、非常対策計画を新たに作るわ、後始末に忙しい。日本の節電の努力を称える声もあちこちで上がった。

日本が大震災の影響で今年の夏、非常に苦労しているという話はニュースで聞いて、頭でわかっているつもりだった。ただ、海を隔てていることもあって、どこか他人事になっていたのも事実。日本から来るお客さんに「大変ですね」と挨拶はしても、実感は伴っていなかったが、この日の停電で改めて日本の皆さんの節電の努力に頭が下がる思いがした。

町ネタ 東南西北

生誕100周年記念
吉澤章　創作折り紙



ニホンザル

開催中～11月27日(日)
紙の博物館（飛鳥山）
☎3916－2320
大人300円

折り紙は日本人であれば、誰もが子どもの頃に親しんだ遊戯の一つでしょう。また、古来から御幣や熨斗など、儀礼的な折り紙も生活の中に息づいてきました。

この折り紙を新しい感覚でとらえ、独創的な造形芸術の域にまで高めて、共通の言葉『ORIGAMI』として世界に広めた人物こそ、吉澤章氏です。

吉澤氏と当館の関わりは深く、1962（昭和37）年以来、毎年創作折り紙の講習会や作品の展示を開催させていただき、2005（平成17）年の誕生日に94歳で他界される前年まで、約半世紀にわたってご指導をいただきました。今年は吉澤氏の生誕100周年に当たることから、それを記念した展示を当館で開催する運びとなりました。

一枚の紙に生命を吹き込み、動植物などの生物、仮面、心象、天体など森羅万象を折り紙で表現した吉澤章氏は、"神宿る手"と称されました。折り紙を心より愛し、折り紙に人生を捧げた氏の業績を、様々な作品とともに、その創作活動がうかがわれる貴重な資料も交えてご紹介します。

絵巻で楽しむ 源氏物語

千年の恋物語に
きっとあなたものめり込む

「いつかは読みたい本」第1位

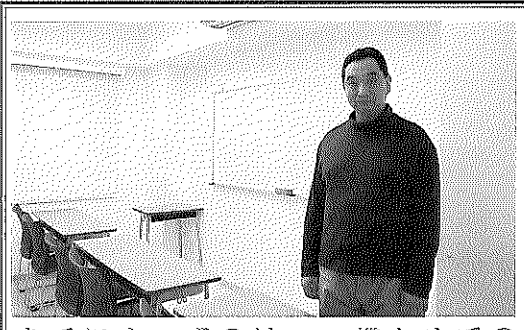
日本文学の最高峰「源氏物語」。
美しき絵巻とともに物語を楽しむ読める。
待望のシリーズ、ついに創刊！

特色1　1号1帖。物語がわかりやすく面白い
特色2　源氏絵巻を一堂に集めたシリーズ
特色3　リアルに分かるイラストや図が満載

11月22日(火)創刊毎週火曜日発売／創刊サービス定価390円／2号以降定価590円（税込）／A4判変型・オールカラー

＊表紙は変更になる場合があります。

お求めはASA田端・ASA西ヶ原までお気軽に!!



12月生&冬期講習生を募集。高2はラストチャンス！

大学受験塾 秀門会

秀門会では、12月から始まるコース（英語・数学）と冬期講習生を募集する。対象は難関大学への現役合格を目指す高1、高2。

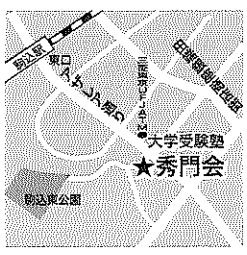
同塾では9月から通常授業が始まっているが、今回募集する12月生のうち高2は冬期講習が必修となる。9月生との差を埋める集中講座の意味を持つので、高2にとってはこれが最後のチャンスだ。高1は冬期講習のみの受講も可能なので、復習や基礎固め、塾が自分に合うか見極めるにもよい機会となるだろう。

秀門会の難関大学への現役合格実績は、1学年20名以下の小規模塾としてはずば抜けている。

「今から本気で勉強すれば、現在の成績に関わらず、高確率で志望大学に合格できます。もちろん無理な努力は求めません」と松田浩之代表。

授業は2～8名程の少人数制。オリジナルテキストを用い、塾長はじめベテラン&現役東大生ら講師陣がきめ細やかな指導を行う。1月からは高2の内部生対象に化学と物理を開講予定。詳しくはお問合せを。

お申し込み・お問合せ
フリーダイアル 0120-599-440
受付時間
火17:00~19:00
水17:00~19:00,20:30~21:30
木16:00~21:30
メール・FAXのお問合せは随時受付
FAX：03-3941-3147
http://www.shumonkai.com



・豊・駒込1－20－4
・☎3941－5505

【町ネタ東西南北参照URL】●紙の博物館 http://www.papermuseum.jp/exhibit/temporary/2011/0917.html